



医療系夫婦の生活: 6班 (医学セミナーの試み 2014)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福島医学会 公開日: 2019-09-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 管野, 由佳, 菊池, 悠, 菊地, 洋平, 工藤, 慶祐, 黒田, 裕和, 小橋, 茜, 小牟禮, あゆみ, 近藤, 聡 メールアドレス: 所属:
URL	https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2002126

▼日焼けによる影響

1) 悪影響

日焼けによる悪影響は多々あるが、代表的な2つを紹介する。

〔光老化〕

シミ、しわの原因となる。

シミ…メラノサイトの働きにより、大量のメラニンを量産し続ける。

しわ…真皮にある弾性繊維が障害される。

〔発がん〕

DNA 配列の変化が起こり、正常に遺伝子が機能しなくなり、突然変異を引き起こす。

2) 好影響

日焼けによる好影響はほとんどない。好影響というよりは、意識せずにあびる紫外線量で十分な効果を発揮する自然な反応である。

血中のカルシウム濃度を高めるビタミン D を産生する。また、ビタミン D の前駆体を活性化作用を持つ。

▼まとめ・紫外線対策

米国皮膚科学会（AAD）は5月20日、日焼け止め選びに役立つ基本情報を紹介した。日焼け対策を行う上で重要な点は、(1) SPF 30 で紫外線は97%遮断される。SPFが高くても100%遮断はできないので、屋外等では2時間おきに塗り直したい (2) 6カ月未満の乳児は直射日光下を避け、日焼け止めは使わないのが理想。6カ月以上の子どもには肌に優しい成分のものを選んで使用可能 (3) 日焼け止め成分の毒性や健康への害の懸念より、日焼け止め使用による皮膚癌予防の利点の方が上回る。

また、最適な日焼け止めを選ぶと同時に、肌の露出を避ける服装やサングラスの着用、日陰利用などの他のUV対策を併用することが大切である。どの日焼け止めにしても、製品表示にあるUV防止効果を得るには、たっぷりしっかり塗ることが大事である。

▼参考文献

1. http://www.med.teikyo-u.ac.jp/~kaibo/soshiki/system_of_sense_organs/02.html
2. www.derm-hokudai.jp/textbook/pdf/1-04.pdf

3. <https://www.aad.org/stories-and-news/news-releases/sunscreen-101-dermatologists-answer-burning-questions-about-sunscreens>

医療系夫婦の生活

6 班

管野 由佳, 菊池 悠, 菊地 洋平
工藤 慶祐, 黒田 裕和, 小橋 茜
小牟禮あゆみ, 近藤 聡

(福島県立医科大学医学部一年)

1. はじめに

我々医学部の一年生にとって、医師という職業人としての生活は勿論、結婚生活というのはまだ遠い将来の話であり、想像し難いものである。親族に医師がいる者も多い中で、その仕事の過酷さから将来の家族像に漠然とした不安を感じるものも多い。

これから医師となる身として、具体的な将来の生活像とその備えの手がかりを知ることで、将来の不安を少しでも軽減させ、充実した医師生活を送るきっかけとしたいと考え、今回の医学セミナーの機会に調査に取り組んだ。

2. 研究方法

1) アンケート調査

本年7月に本校医学部の一年生130名を対象として、結婚・就労に関するアンケート調査を行なう。

2) インタビュー調査

本年8月に福島市内で勤務している医師に結婚・就労に関するインタビュー調査を行なう。

3. 結果

1) アンケート調査

アンケートに回答したのは89名であった。その結果、男子83%、女子86%が結婚したいと考えていた。結婚相手の理想の職業は図2の表となり、男女ともに職業を問う者が6割程度であり、配偶者に医師を理想とする者も一部見られた。

親に医療従事者をもつ者が28名いる中で、親

結婚相手の理想の職業

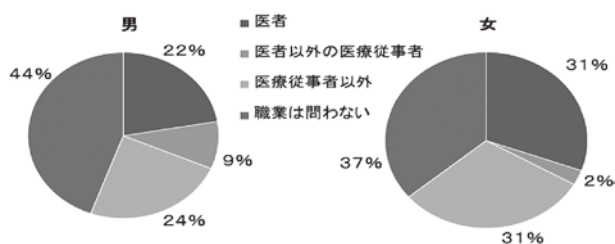


図 1.

	男 (親医)	男 (not 医)	女 (親医)	女 (not 医)
時間の確保	3	7	3	7
仕事と家庭の両立	2	7	5	8
婚期のタイミング			1	2
出産のタイミング			2	2

母数：男（親医 12 名），男（not 医 30 名），女（親医 13 名），女（not 医 22 名）

図 2. 家庭不安の理由

に仕事を辞めて欲しいと思ったことがあるのは 1 名であった。将来自分が持つ家庭に不安がある者は男性で 48%，女性で 71% となり，内容を分別した結果は図 2 となった。家庭での時間の確保，仕事と家庭の両立については男女ともに不安があり，婚期については女性のみ意見であった。

具体的には，子供と関わる時間が短くなる，互いの精神的に余裕がないときうまく付き合っているか不安，開業医だったら子供に継がなくてはとのプレッシャーをかけてしまいそう，出産後の職場復帰や子育てに関する周囲の理解が得られる

のか不安，医師として一人前になるのに時間がかかり婚期が遅れそう，離婚される可能性がありそう，といった内容が見られた。

医師としての働き方に関しては図 3 のような結果となり，40～60 歳で勤務医を希望する者は半数に満たなかった。

2) インタビュー調査

卒業後の経過について，A 氏は大学院 3 年目で結婚し，大学病院に勤務後 2 人を出産しており，出産に伴い夜勤の勤務形態を工夫し家族との時間を確保していた。

B 氏は，卒直後に結婚し，専業主婦のまま二子を出産する。その後大学病院に勤務し，子供の成長に伴い，家庭での時間を確保するため夫婦で開業していた。

C 氏は，卒後 5 年目で大学病院勤務中に結婚し，二子の出産に至り，その後同病院に勤務していた。

子育て中のエピソードとして，子供が急病になったときの対処が大変だった（A 氏），夫婦ともに大学病院へ出勤する時は病院内で子供を交互に面倒をみていた（B 氏），休日の出勤日に病気

医師としての働き方

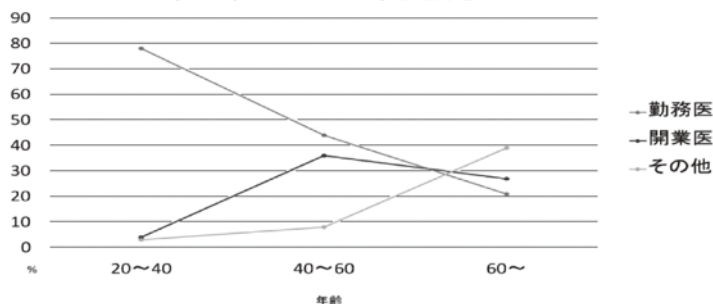


図 3.

の子供は夫婦のどちらかが仕事を抜けて面倒をみた(C氏)といったものがあった。

また、結婚・就労に関して学生に対するアドバイスとして、子供を一番に考えて状況に合わせ、パート・大学勤務・開業・専業主婦等の選択肢から働き方を考えるべきである(氏)、具体的でなくても結婚についてほんやりと考えておくべきである(氏)、男性と女性との医師のキャリアパスは違うため、女性は特に考えておいたほうがよい(氏)、家庭をもちたいならばパートナーを早めに探すべきである(氏)、パートナーとなるべき人に出会ったら普段から結婚・就労について話し合う方がよい(氏)、緊急時に頼りにできる人を2・3人確保できる状態を家庭や職場につくっておくべきである(氏)、大学時代から真摯な態度を見せ、周りとのコミュニケーションをとることで、周囲に協力してもらえ環境を作るべきである(氏)といった内容が聞かれた。

4. 考 察

アンケート調査より図1を見ると、医師という仕事の特殊性から、職業の別こそあれ、どういう職業の相手を選ぶべきかを学生の半数以上が既に考え始めていると思われる。また、女子は男子よりも家庭に対する不安を多く抱える傾向にある。これは女子が出産や子育てを控えることに起因するのであろうが、他方で男子も半数近くが家庭への不安を抱えていた。図2より、その不安は、医師の仕事が多忙であるというイメージに由来すると思われる。だが、一方で興味深いのは、親に医療者をもつ者の大部分が親に医療職を辞めて欲しいとは思ったことがない点である。両親の子供への配慮や勤務形態の工夫などの努力もあろうが、子供は親が考える以上に親の仕事について理解を示すものであるとも考えられる。だが、今回の調査対象が医学部生であり、医療従事者を親に持つ子供で医療職以外に従事するものに比べ、医療職への憧れや理解度が大きいことは考慮すべきであろう。加えて、子供時代に親に医療職を辞めてほしいと思ったことはない学生たちからも、将来の家庭への不安が聞かれていたことは、辞めてほしいとまでは思わなくとも、家庭不安の原因となるような不満や寂しさなどのマイナスな感情を抱いていたとも考えられる。また、図3より若い時期は勤務医で働き、40代以降は開業しようと考え

ているものが半数近くいることから、体力面での不安と共に、家庭不和への不安から家庭に時間を費やす勤務形態を選択していると思われる。

インタビュー調査より、女性医師は出産に伴い、働き方を工夫することで子供との時間を確保していた。今回対象とした少数例で、必ずしも勤務形態の工夫で子供との時間が確保できるとはいいがたいが、先生方のアドバイスのように、前もってそのサポートが得られるよう周囲との関係性を築いたり、就職する際に、自身の親がサポートを如何に得るかなどを早い段階で考えておくことが重要になると思われる。これは女性に限ったことではなく、家事・育児にかかわるであろう男性にもあてはまる。男子のおよそ半数が将来持つ家庭に不安を持っていることから、男性の家庭を重視する傾向が見られ、こうした結婚や出産に向けた準備が男性側の不安の緩和にも有用であろうと考えられる。

また、8割が卒業後には勤務医としての働き方を考えていたものの、勤務医以外にもパート勤務や早期開業、一時的には専業主婦といった選択肢があることを視野に入れ、自身が勤めるであろう地域で収入はどの程度になるのか、配偶者との総収入の見込みはどの程度か、子供の人数とそれにかかる費用と総収入のバランス、仕事をいつどのように切り替えるかなどを具体的に調べておくことで結婚・出産後の生活を良好に保つ手段の手がかりが得られるであろうと考えられる。

妊娠・出産・育児や家族的責任を果たすための母性保護や休暇制度などは法的に整備されてきてはいるが、まだ不十分であり、不十分な法律も実際には機能していないのが現状であり、年齢階級別の就業率について、30代において離職するM字カーブのボトムは、これに起因するとされている¹⁾。医師の資格を有し、必ずや就労するであろう、そしてキャリアアップを求め、また求められるであろう医学部に所属する女性にとって、育児は男性に代替されても妊娠・出産は代替され得ず、社会制度がいまだ不十分である以上、自分自身で就労を持続できるような整備を行なっていくことが肝要であると思われる。そして、医療系の女性を配偶者とするかもしれない医学部の男性は、この点について十分な理解に努めることで良好な家庭生活を築いていくことができるのではないかと考えられる。

5. ま と め

学生の中には将来の家庭に不安をもつ学生もいるが、子供側としては親に仕事をやめて欲しいと思っていないようである。学生の時期には、結婚したいという意思があっても、相手のことも考慮して就職等をそれほど考えてはいない傾向にある。だが、医師は学生のうちから結婚・出産後の生活を考えておくべきであり、親のサポートなどを含む準備を早くから行なうことが重要である。

6. 謝 辞

インタビュー調査にご協力頂きました先生方、研究発表にあたりご指導頂きました先生方、アンケート調査に協力頂いた本学医学部一年生の方々に感謝致します。

7. 参 考 文 献

- 1) 天野晴子, 2011, 女性白書 2011, ほるぷ出版

VIVA! ふぐすま

～福島の地域医療の現状と対策～

7 班

斎藤 杏, 斎藤 智樹, 斎藤 優衣
坂本 理恵, 佐川有理子, 笹木 彩華
佐々木 良, 佐々木遼介

(福島県立医科大学医学部一年)

1. 調 査 動 機

班員全員が福島県出身者であり、これから福島の医療を担う者として地域医療の現状を把握したいと考えたため。

2. 調 査 方 法

班員それぞれの出身地の病院、計6ヶ所に伺い、医師に話を伺う。

インタビューの内容としては、

- (1) 患者さんの年齢構成・来院される理由
- (2) 医師が感じる地域医療の“魅力”
- (3) 地域医療に対して医師の感じる“壁”
- (4) 医師が行政に求めることとその理由

- (5) 医療を地域の方々にどのように利用してほしいか

の五つの項目に統一し、話を伺った。

また、文献などを参考にして、地域医療に関する基本的な知識を調べた。

3. 結 果

3-1. 地域医療の基本的な知識

地域医療とは、地域社会の住民の健康状態の向上と回復のために、地域特性に根ざした医療の展開を目指しているもの。また、病院など施設に収容して行う医療に対して、在宅を中心に生活の場での治療に重点をおく医療のことをさすこともある。

昭和38年の医療制度調査会において、医療政策の基本的立場として、地域を基盤とした包括的医療サービスを提供する「地域医療」が提唱され、地域医療という言葉が広まった。

地域住民の健康維持・増進を図るべきであるのは明らかであるので、地域医療は、地域特性に応じた患者中心の一貫した総合的保健医療サービスを、効果的、効能的に提供する仕組みのありかたである。

3-2. インタビュー

- (1) 患者さんの年齢構成・来院される理由
- (2) 医師が感じる地域医療の“魅力”
- (3) 地域医療に対して医師の感じる“壁”
- (4) 医師が行政に求めることとその理由

の四つの項目を地域ごとに比較して、表1にまとめた。

- (5) 医療を地域の方々にどのように利用してほしいか、利用してほしいか

という質問の解答はつぎのようになった。

済生会福島総合病院 大竹秀樹先生

- ・待ち時間が多く、患者さん一人ひとりにあまり時間を割けないため、落ち着いている患者さんに関しては診療所やクリニックを受診することも検討してほしい
- ・コンビニ受診が増えているため、患者さん自身が掛かり付けの小さい病院を見つけておいてほしい
- ・施設と同じ感覚で病院を利用する患者さんがいるため、訪問看護やデイサービスなどの社会福祉の方の力をもっと活用してほしい